

## アンベール城塞の天上に 消えた音楽—遙かなる インドの思い出



旭川医科大学医師会  
旭川医科大学 病理学講座腫瘍病理分野

西川 祐司

37年前の夏、私は友人2人とともにインドに滞在していた。マニラ経由でコルカタに入り、国内線に乗り換えてムンバイに移動した後、鉄道を使ってカルカッタに戻り、バンコク経由で日本に帰る約4週間の旅であった。帰国するための航空券を予約しているだけで、おおまかな旅程は決めていたものの、駅に行って二等、三等列車の切符を買い、ホテルは現地に着いてから観光案内所などで探すという、今から考えるとかなり危なっかしい旅行であった。でも不思議なもので、我々はあまり不安を感じることはなかった。若者特有の怖いもの知らずということもあるかもしれないが、当時はテロ事件の恐れも少なく、インドの国内も比較的安定していて、人々は貧しかったけれども純朴で穏やかであった。

我々の旅の主な目標はエローラ、アジャンターの石窟寺院群、アーグラのタージマハール、ヴァーラーナシーの沐浴場を訪ねることであった。これらは言うまでもなく素晴らしく、予想に違わない、もしくはそれ以上の強烈な印象を残してくれた。そして、一眼レフで大量に撮影したカラー・ポジのスライドを見ることにより今でも鮮明に記憶を呼び覚ますことができる。

今回、書きたいと思ったのは、失われてしまった音の思い出である。我々は石窟寺院群を見た後、デカン高原を北上し、ジャイプールに入った。ハーワ・マハールという風変わりな建築物やジャンタル・マンタルという古い天文台で有名なこの街の近郊にはアンベール城塞があり、我々はバスに乗ってそこを訪ねた（ジャンタル・マンタル、アンベール城塞はその後、世界遺産に登録された）。城塞の下の水辺でサリーを着た女性たちが洗濯をしているのが印象的であった。帰り際、バス停留所の近くで、帽子をかぶった男性がこれまで私が見たことのない弦楽器を使って、エキゾチックな音楽を演奏していた。この世のものとは思えないような音が響き渡り、私はただただ聞き惚れていた。出発時間が迫り、バスに乗り込んだのだが、驚いたことにその男性がバスの窓越しに私に楽器を手渡した。どうも200ルピーで売っても良いと言っているらしかった。インドでは当たり前な値段交渉として、100ルピーでどうだと言って、100ルピーを上げたのだが、彼は首を横に振っていた。しかし、次の瞬間、バスは容赦なく出発してしまった（あと50ルピーくらいは余分に払う気持ちがあったのだが、いまだに申し訳なく思っ

ている)。手に残ったのは、椰子の実を半分に割って皮を張りつけた本体に木製の柄がつき、金属の弦と共鳴弦が張ってある手作りの擦弦楽器であった。これは弓とともに無事に日本に持ち帰り、現在も自宅に飾ってある。彼の演奏していた音楽は、その後数日間私の頭の中で鳴っていたが、次第に消えてしまい、もはや思い出すことはできない。もちろん当時はビデオのような便利な機器は存在しなかったのだが、せめて携帯録音機を持っていけば良かったと悔やまれる。しかし、美しい音楽の印象だけは乾燥した荒涼とした風景の記憶とともに残っている。

以上のように、私は医学部6年の夏休みのほとんどをインド旅行に費やしたことになる。現在では考えられないが、当時は、少数派ではあってもこのような無謀なことが可能だったのである。私は生まれて初めて異国を旅し、たくましく生きるインドの市井の人々に畏敬の念を抱いた。この経験は、その後の私の生き方に少なからず影響を与えている。また、旅行中には自分の将来について考えを巡らすこともあったが、これは結局私が病理学の道に進むことを後押ししてくれた。久しぶりに当時を振り返り、若い時代に冒険をして良かったと心から思っている。

